

檀信徒にやさしく説く 喪儀と墓地

第一部

- 第一章 葬儀とは何か
- 第二章 葬送儀礼の意味
- 第三章 葬具
- 第四章 追善供養
- 第五章 水子供養とペット供養

第二部

- 第一章 墓とは何か
- 第二章 墓地の種類と納骨堂・永代供養墓
- 第三章 墓標
- 第四章 墓の継承の問題

Q & A

葬式仏教はダメな仏教か

「葬式仏教」という言葉は、「種類の使われ方がされます。一つは、日本仏教の特殊性を示す場合で、中世後期以降、その布教・教化が葬祭を中心に行なわれてきたことを指します。もう一つは、本来問われるべきではない葬送に僧侶がかまけていて、修行者としての本分を果たしていないという批判の言葉として使われます。どちらかといえば、後者の意味で使われることが多いように、そのため、日本の仏教は堕落した宗教だというイメージが流布してしまいました。

後者の説の根拠は、お釈迦さまが弟子たちに世俗の儀礼に関わることを禁じたということに基づいています。中村元氏教の本質のように思わ仏教では行なわなかつ俗の実行をまったく世（原始仏教の生活倫理

しかし、それは民衆の死に対する恐れや、肉親の死に対する悲しみを無視したということではありません。むしろ、それを超越する道を探り、広めようとしたのが仏教だったのです。

原始仏典の「スッタニパータ」に収録された「矢」という短いお経は、子どもを亡くして悲嘆に暮れる在俗信者に対してお釈迦さまが説かれたものとして残っています。これが仏式葬儀の原形といえるでしょう。あるいは、原始教団では在家信者やその家族が亡くなった時、この経を誦経して、死の悲しみと恐れを乗り越えようとする説法がなされたのかもしれない。「矢」には次のような一節があります。

「だから尊敬するべき人のことを聞いて、亡くなった死者を見ては、『かれはもうわたしの力及ばぬものなのだ』とさとして、悲しみ嘆きを去れ」

を行なうのである以上、その守るべきなのです。それらとしない範囲であるなら、故に形式だけ整えればよいといふ、葬儀社の人間が僧衣を着て、テップでお経を流して行なえばいいのです。

葬送においても宗教性が希薄化している現代でこそ、僧侶は宗教的指導者としての自覚をもつべきです。そして、葬儀がプロデュースするような気持ちで、檀信徒や葬儀社と向き合うべきでしょう。

Q & A

水子供養した方がいいかと尋ねられたら

供養とした方がいいか、しない方がいいかと尋ねられたら、もちろん、するべきだと答えるのがよいでしょう。ただし、供養といってもいろいろな方法があることを教えてあげてください。デリケートな問題ですので、立ち入ったことは聞きたいですが、可能な範囲で事情を聞いて、その人にふさわしい供養法を考えてあげてください（逆に話を聞いてもらいたいと願っている場合もあるでしょう）。自宗や地域で信頼できる水子供養を行なっている寺院を紹介してあげるとよいですが、施餓鬼などの行事を通して水子供養してあげる方法もあることを教えてあげてください。

しかし、何より大事なのは、供養を願う本人の心構えです。寺院に供養をお願いしたから、もう責任も心配もないと思われるようでは困ります。

通夜と葬儀と両方行なうのはなぜか

このような疑問を口にする人は少ないかもしれませんが、故人の遺志は尊重されなければならないというのは、当然のことです。しかし、忘れてはならないのは、葬儀とは遺族などが故人を霊界へ送る儀礼だということです。それは残された者たちの生きざまや宗教観とも密接に関わります。故人の遺志だけで決定されるべきです。また、家族の意向についても、エ

ます。

どんなに愛しい人の遺体でも、そうやってしまふと嫌悪の対象にならざるを得ません。黄泉の国で愛憎イザナミの変わり果てた姿を見て、思わぬ声を叫び出したイザナミを酷薄とはいえないでしょう。

そして、そうした遺体を運んだりするのでから、「清め」ということは、衛生上の観点からも必要な行為だったといえるかもしれません。しかし、一方でそうした忌み嫌われる死体を、埋葬し、引導を与えていたのが、民衆の間で活動していた仏教僧だったことを忘れてはなりません。

死体は忌み嫌われるのではなく、丁寧に葬るべきものであることを、身をもって示したのが僧だったのです。中世までは、天皇や貴族を除けば、遺体は野や川原などに打ち捨てられたのです。

現在は遺体が汚れや臭いを発するということもほとんどなくなりました。流行して、各地で行なわれていたもので、その影響を受けていることは充分考えられます。

一方、歴史学者や民俗学者は殯「もがり」などの古代の葬儀の名残ではないかといっています。古代の人は遺体の周囲で歌舞を行なったり、飲食を行なうことで死霊を慰めようとしたといわれています。こうした霊のお祀りが行なわれる時、肝腎の霊がどこに行っているかわからないように、霊が宿る祭具を置きます。これを依「より」代「しろ」というのですが、櫛や櫛のようなものが使われます。古代人は櫛状のものを房状のものに霊は宿りやすと考えたようです。

そこで気がつくのが、葬送行列の道具に櫛状のものが多く残っていることです。つまりこれらはいづれも依り代としての機能を期待されていると思われるのです。

本人自身の供養の心こそが必要なのであり、僧侶はそれを仏さまに伝える役目を果たしているにすぎません。

それゆえ、相談者には供養法とらって、ヨ

墓での事故は誰が責任を負うのか

意外と多いのが墓地での事故です。特に古い石塔が多く残る古い墓地は危険性が高いといえます。しかも、近所の子どもが遊びに行き込んだり、墓参の時に走り回って石塔を倒したりということもありません。子どもだけではなく、大人も酔っ払って倒れたりすることもあります。要は注意です。まず、墓地は事故が起きやすい場所だということとを念頭に置いておくことが大切です。

「たとえばダボ（墓石に埋め込まれる金属製の芯のこと。引用者注）の場合を考えてみましょう。確かに単純な横揺れには相当な強度が実現できますが、いったんこれに縦揺れが加わればスッポ抜けしてしまいます（こんな場面を想像するだけで、おかしや、悲しいやら……）。しかし、だからといって、ダボと穴の隙間に接着剤や充填材がガッツリ固めてしまう訳にはいきません。なぜなら、ダボによる耐震の仕組みはこれを中心として回転することによって力の分散が図られているという点にあるからです。となると、これを固定してしまつては接合箇所には不自然な力が過度に加わり、墓石を破損させてしまいます。また、ダボによらず接着剤で圧着させただけでは、切断力に加わる横揺れに対して、必ずしも万全であるとはいえないかもしれません」（お骨のゆくえ）

こうしたことから、最近では免震構造をもった立体墓になるものも登場してきたということです。しかし、既成の墓地を免震構造にするのは現実的に不可能で、古い石塔すべてに倒壊対策を施すのも容易ではありません。したがって、ソフ

いるとさえいえるでしょう。

ですから、お清めの塩はいりません。そのようなことは行なわない方が、故人に対して失礼ではないでしょう。

しかし、これは民俗信仰に根拠したもので、そうしたものは心の奥底にまで根をはっているものです。どうしても気になるというのなら、やつと差し支えはないでしょう。

ただ、それを行なった後、もう一度故人の菩提を思つて合掌するくらいのことはいじょうです。

お棺に入れてよいもの、悪いもの

故人の愛用していたものを棺に入れて、一緒にあの世に送ってあげたいというのは人情でしょう。流行して、各地で行なわれていたもので、その影響を受けていることは充分考えられます。

一方、歴史学者や民俗学者は殯「もがり」などの古代の葬儀の名残ではないかといっています。古代の人は遺体の周囲で歌舞を行なったり、飲食を行なうことで死霊を慰めようとしたといわれています。こうした霊のお祀りが行なわれる時、肝腎の霊がどこに行っているかわからないように、霊が宿る祭具を置きます。これを依「より」代「しろ」というのですが、櫛や櫛のようなものが使われます。古代人は櫛状のものを房状のものに霊は宿りやすと考えたようです。

そこで気がつくのが、葬送行列の道具に櫛状のものが多く残っていることです。つまりこれらはいづれも依り代としての機能を期待されていると思われるのです。

本人自身の供養の心こそが必要なのであり、僧侶はそれを仏さまに伝える役目を果たしているにすぎません。

それゆえ、相談者には供養法とらって、ヨ

どうして戒名をつけないといけないのか

戒名の「戒」は戒律の戒です。戒律というのは、簡単にいうと仏教徒が守るべき決まりということです。原始仏教と大乘仏教、在家と出家など戒律は違っているが、その基本となつていいるのは、五戒もしくは十善戒です。五戒とは、殺さない（不殺生）、盗まない（不偷盗）、ふちやうと（不婬）、邪な性行をしない（不邪淫）、嘘偽りを言わない（不妄語）、酒を飲まない（不飲酒）（一おんじゅ）こと、十善戒は、不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不悪口・不両舌・不両舌・不両舌・不両舌（二枚舌をしないこと）、不綺語（突飛なことと言わない）、無貪（むさばらない）、無瞋（むしん）（怒らない）、正見（正しい見解をもつ）のことです。

戒名は、こうした戒律を守ることが仏教の実践であるといつた教えを受け、実際に戒律を守ることと誓つた者に授けられる、仏教信者としての名

「たとえばダボ（墓石に埋め込まれる金属製の芯のこと。引用者注）の場合を考えてみましょう。確かに単純な横揺れには相当な強度が実現できますが、いったんこれに縦揺れが加わればスッポ抜けしてしまいます（こんな場面を想像するだけで、おかしや、悲しいやら……）。しかし、だからといって、ダボと穴の隙間に接着剤や充填材がガッツリ固めてしまう訳にはいきません。なぜなら、ダボによる耐震の仕組みはこれを中心として回転することによって力の分散が図られているという点にあるからです。となると、これを固定してしまつては接合箇所には不自然な力が過度に加わり、墓石を破損させてしまいます。また、ダボによらず接着剤で圧着させただけでは、切断力に加わる横揺れに対して、必ずしも万全であるとはいえないかもしれません」（お骨のゆくえ）

こうしたことから、最近では免震構造をもった立体墓になるものも登場してきたということです。しかし、既成の墓地を免震構造にするのは現実的に不可能で、古い石塔すべてに倒壊対策を施すのも容易ではありません。したがって、ソフ